

会議報告書	
会議名	令和2年度 草津市立教育研究所 第2回運営委員会
日時	令和3年2月5日(金) 午後3時30分から午後5時00分まで
場所	草津市立教育研究所 研修室
出席者	委員：8名 糸乗 前、森 登世美、奥村 真美、竹内 美和子 久保 いづみ、高木 洋司、山本 忍、宇野 その子 教育委員会：1名 児童生徒支援課長：竹田 敏彦 教育研究所：11名 所 長：藤井 泰三 副参事：恒松 睦美 指導主事：奥村 真也 研究員：陌間 智 指導員：中谷 仁彦、西澤 留美子、伊庭 裕美、鈴木 信之 スキルアップアドバイザー：北川 健、小宮 康、仲野 忠克
欠席者	委員：2名 小野澤 祐子、橋本 篤典
運営委員会の関連資料	<input checked="" type="checkbox"/> 有(別添のとおり) <input type="checkbox"/> 無
記録作成者	草津市立教育研究所 研究員 陌間 智

所 長：ただいまより草津市立教育研究所第2回運営委員会を始めます。

運営委員の皆様方には、公私とも御多用のところ御出席賜りましてありがとうございます。本運営委員会ですが、傍聴席が設けられますことと、会議の内容が草津市ホームページで公開されますことを御了解くださいますようお願い申し上げます。それでは、会を始めるにあたりまして、草津市教育委員会事務局児童生徒支援課長竹田敏彦より、挨拶申し上げます。よろしくお願ひします。

竹田課長：皆さま、こんにちは。児童生徒支援課の竹田でございます。

本日は、何かと御多用の中、教育研究所の第2回運営委員会のためにお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。令和2年度草津市立教育研究所第2回運営委員会の開催にあたり、一言挨拶申し上げます。

今年度は、コロナ禍において様々な面で、活動の制約を受けております。しかし草津市では、「子どもが輝く教育のまち くさつ」の実現にむけて、教育関係者のみならず多くの方々のお力添えをいただき、一丸となって、教育活動の推進に取り組んでおります。教育研究所でも、教職員の資質向上をめざして、コロナ禍に対応しながら、実践的で草津らしさを大切にされた様々な事業を企画し、実施して参りました。また、教育の今日的課題である不登校および不登校傾向の児童生徒、ならびにその保護者への支援にも取り組んでまいりました。今後も、さまざまな関係機関と連携しながら、より充実したサポートができるよう、取り組んでまいります。この後、今年度の教育研究所における実績等の説明がございしますが、学校関係者だけで

なく市民の皆様方にも広く御意見を伺い、よりよい運営のあり方等について考えてまいりたいと思います。草津の子どもたちの健やかな育成のため、委員の皆様方からの忌憚のない御意見を賜りますようお願い申し上げまして、挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

所 長：ありがとうございました。それでは、ここよりは教育研究所の規則第7条により、糸乗会長による議事進行をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

会 長：皆さん、こんにちは。滋賀大学教育学部の糸乗と申します。この運営委員会の会長ということで、引き受けさせていただいております。どうぞよろしく願いいたします。最初ですので、少しお話させてください。今年度皆さん大変な状況でお過ごしなのだろうと思います。おそらく歴史に残るような状態で、まだまだいろいろなことを乗り越えていかなければならないのだろうと思います。その中で、草津市はICT等を活用しておりますが、僕たちも結構身近になったのかなと感じております。両親と初めてテレビ電話で会話をする機会もできましたが、逆にこういった形で、対面で皆さんとお会いしてお話することの大切さも感じられたと思います。今日もコロナ対策に十分な御配慮をいただいていると思いますが、こういった形での機会を十分活用させていただきたいと思います。本日、委員としてそれぞれのお立場で御質問や御意見を伺いたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。第1回の運営委員会から時間が経っております。また、今回初めての御参加の方もおられますので、簡単な自己紹介をお願いしたいと思います。教育研究所からお願いいたします。

藤井所長・奥村指導主事・陌間研究員・中谷指導員・西澤指導員・伊庭指導員・鈴木指導員・スキルアップアドバイザー北川先生・小宮先生・仲野先生

所 長：このメンバーで研究所運営しております。この後、事務所の電話対応等のため、鈴木指導員が退出させていただきます。御了解ください。

会 長：どうもありがとうございました。それでは、運営委員の皆さんも自己紹介したいと思います。

糸乗委員、森委員、奥村委員、竹内委員、久保委員、高木委員  
山本委員、宇野委員

会 長：ありがとうございました。まず運営委員の出席者の人数を確認します。何名おられますか？

研究所：8名になります。

会 長：半数を超えているということで、成立するというので進めさせていただきます。それでは、令和2年度の事業実績と課題について担当の方から説明をお願いします。内容は（1）～（5）までありますが、一括して御説明していただけるということ

で、よろしく願いいたします。

令和2年度事業の実績と課題について担当者より説明

※別添資料（1）に沿って説明

- ① 研修事業について（指導主事）
- ② 調査研究に関する事業（研究員）
- ③ 教育相談に関する事業（やまびこ教育相談室）について（指導員）
- ④ スキルアップアドバイザー配置事業について（スキルアップアドバイザー）
- ⑤ その他（指導主事）

会 長：ありがとうございました。それでは、ただいま、御報告があった本年度の事業実績等について質疑に入りたいと思います。御質問や御意見等がありましたら、お願いいたします。

委 員：コロナ禍の中で子どもたちを取り巻く環境が変化してきました。その中で、現場で頑張って日々子どもたちと接している先生方に御礼を申し上げたいと思います。今日、会議の前に下校時の子どもの様子を見てきたのですが、子どもたちがすごく楽しそうに帰っているのを見て少し安心しました。今学校でどんな生活をしているのかなと心配なことが多いです。外出制限は子どもたちにとってとても試練だったと思います。そして6月に学校が再開し、いきなり授業が始まり、今までと違う状況で、どのように勉強を進めてきたのか知りたいと思います。今の発表を聞いていて、子どもも先生もすごいなと感動しました。草津市は4、5年前から情報活用能力を伸ばすために、タブレット端末を活用した研究に全国でもいち早く取り組んでこられたと耳にしています。私が学校パトロールで志津小を巡回していた時に、理科室に Pepper が7台並んでいました。休み時間にも遊びを通して学習していたのを目にしてきました。草津市というのは皆さん方のお力で、素晴らしい子どもたちをつくり上げておられることに感動しています。そのような能力を伸ばしてほしい反面、人格形成・情操教育も大切だと感じています。コロナ禍の中で、人と人が密接に関わり合うことが難しいです。マスクをしていると人の表情が分かりづらい。そのような中で小学生が勉強したり給食を食べたりしている話を聞くと、普段の生活の中で戯れるような場が設けられているのだろうか心配です。やまびこ教室の話を聞いていると、いろんな面で子どもたちが生き生きできる場が設けられている。きっと学校でも先生が工夫されているのだろうと思います。やまびこ教室の指導員も話されていましたが、心身の不調を訴える子ども達のケアのためにも、やまびこ教室のような場所の役割がとても大きいと感じました。子どもたちにとって学校に行くことだけでなく、安心・安全な場所があることは、大事だと思います。未来を担う子どもたちを大切に育ててあげるために、これからも子ども達が輝ける場所を作っていただけると有難いです。

会 長：子どもたちの様子を御紹介していただければと思います。

委 員：就学前の話になりますけど、コロナ禍で交流授業や外へ行くことができなくなりました。どこの園でも、できないから終わりではなくて「何ができるのだろう」という視点で、子どもたちのために縮小するなどして、いろいろな事業をやっていると思います。6月、4歳児はマスク一つつけるのも大変でした。一人でつけられない、表裏が分からない、落とすなど、大変でした。夏は熱中症の心配があるので園庭で遊ぶ時には外す、ご飯を食べる時はマスクケースに入れる、普段園舎内ではつけるなど、少しずつマスクの管理が子どもなりにできるようになってきました。子どもたちもコロナ禍に慣れてきたと感じています。七夕やクリスマスなどで願い事を書くときに「雪が積もりますように」と同じ数ぐらい「コロナがおさまりますように」と書いていました。また、4歳児が会話の中で「今日、在宅や。」という言葉を書いたりしていました。保護者が狭いコミュニティで暮らしておられるので、たくさんコミュニケーションをとることや、参観は少人数で、発表会はクラスごとに行うなどいろいろな工夫をしてきました。

委 員：草津型アクティブ・ラーニングの状況について質問があります。能動的な学習は昔からやってきた。子どもたちが力をつけるには受け身ではだめ、能動的に学習をさせなければいけない、というのは今も昔も変わらないと思っています。それを作る要素があると思います。一つ目は「めあて」。報告の中で「単元を貫く課題の設定」とありますが、子どもたちの中には乗る子もいるけど乗らない子もいる。そのような時にどうするのか。単元を貫く課題を立てる工夫があれば教えてほしい。二つ目、子どもが作る学習の要素として、「学び合う」ということが大きいと思います。先生の力も大きい。でも子ども同士が「学び合う」場を先生がどのように作るかで、子どもが伸びていくと思います。「学び合う」時に「自尊感情」にこだわっています。学び集団のもとになる「自尊感情」に関する研修をもっとされたいのと思っています。「自尊感情」について、もう少しお話を聞かせていただければと思います。

研究所：アクティブ・ラーニングから単元を貫く学習課題の設定についてですが、今回私は社会科を中心に研究を進めさせていただきました。社会科の学習は問題解決的な学習を目指していますので、一つは単元の導入の時に今ある社会現象の中で、子ども達が「これはどうなんだろう？」「これは不思議やな？」というような「はてな」を作る取り組みをしています。その「はてな」をできるだけ全員に持たせることが工夫です。そして、それぞれの持っている「はてな」を吸い上げて、そこから学習課題をつくる。つまり教師が作るのではなく、子ども一人一人の思いから学習課題を作ることによって、全員が最後まで学習課題を追究できると考えています。そのために、乗ることが難しい子でも「はてな」が作れるような導入を工夫しています。

委 員：何か、ものを見せるのですか？

研究所：パワーポイントとか映像を見せることをします。短い時間でインパクトのあるものを見せるのが工夫です。

委員：私たちは、池に竿を入れたら魚がガバツと食いつくようなえさを与えてもらっていた。食べないようなえさは、子どもたちは眠たいだけ。ガバツと魚が食いつくようにするのが先生の力。それがアクティブの一番大事なところ。ようするに、学習は「めあて」の持たせ方が一番やと言ったのです。それから先生の支援内容や指示。そこをもう少し詳しく聞きたかったのですが、私の質問の仕方がまずかったので。二つ目はどうですか？

研究所：「自尊感情」についてですが、今研究員が話したように、自分の疑問が授業に生かされていると子どもが感じることは、自分が学習を作っているということに繋がって、子どもたちの学習に対する自尊感情が育っているのではないかと感じます。居場所もそうですが、自分の意見が学級や学習の中で生かされるというのは、子どもたちにとって大きな力になると感じますので、それを含めた授業づくりが大事だと思います。私はいろいろな学校を回っているのですが、子ども達が生き生きしている授業の先生たちの関わりは、意見を間違ってしまった子どもに、どんな言葉をかけたりどんな態度で接したりしているかがとても大きな差が出ている部分かなと感じさせていただいています。そのあたりで先生の資質向上を図っていければいいのかなと考えています。

研究所：私からも「自尊感情」についてお話させていただきます。教科の中で授業の中で子ども達が感じられるのが一番だと思いますので、相互に認め合う場面をどれだけ作れるかとか、相手の言っていることを認め合うような仕組みをどれだけ授業の中で入れていくか、違っている所を違うと言って対立するのではなく違いを伝えられるようにする、もしくはその違いを自分の持っていない視点として視野を広げることにつなげていけるような教師の投げかけとか仕組みが教科のスキルとして必要だと考えています。研修では、草津教員塾と言って10年までの若い先生のための研修で、教科スキルの部分と「クラス作り」の部分育てていく必要があると考えています。研究会等でも学力や学習意欲が上がっていくクラスは、仲が良かったりお互いのことを認め合ったりできるクラスだと言われていました。その集団がどんな集団に育っていくかによって、分からない子を教えたり、「わからん」と言えるから聞けたりすることにもつながっていく。お互いが価値を認め合って、得意なこと・苦手なことを理解し合える集団になっていくと、学力が上がるということは昔から言われています。そういう意味で「クラス作り」に焦点を当てた研修はあります。「自尊感情」に焦点を当てたものはないのですが、共通する部分はたくさんあります。教科の部分だけでなく集団作りについても、今後研修を組んでいきたいと思っています。

委員：学習が終わってから「ぼくはAちゃんのお話でよくわかった。」とか言う場合がある。書いたものを見ると「先生の説明でわかった。」というのが多い。でも「Cちゃんの、Dちゃんのお話が一番わかった。」というのが私は多かった。そういうのを引き上げる学びの教室、「何言ってもいい。」「まちがってもいい。」という教室、「何言うとなんねん、あれ。」という否定を作らない教室。そういう視点でアクティブ・ラーニング

のポイントを考えてみてはどうですか。その中の「めあて」と「学習集団」という二つについてお尋ねさせていただきました。

会 長：他に何かございませんか。せっかくですので、一言はいただきたいと思います。

委 員：今年 iPad が一人一台になり、臨時休校になった時もオンラインで学校とつながって授業ができる仕組みが整いつつあるのですが、文房具のように常に手元にあり情報を集めて利用できるという便利などがある一方で、ネットの世界はどこまでも広がっていたり、子どもの iPad で YouTube が見られたりしている。調べ学習をしようとしたときに、本で調べなくても iPad さえあれば何でもできると思っている子がいる。図書室に行けばたくさん本があり得られる情報がたくさんあるのに、とにかくインターネットになっているのが心配。活用という面においては、大人より子どもの方が早く覚えて使えるようになってしまう一方で、危機意識やモラルの部分の意識がまだまだ低い。家に持って帰った時、オンラインでつながった時に自分の背景に家が特定できるものが映っていても何も気にしていない。情報発信をする際に気を付けなければならないことがわかっていない。また持って帰って教師の目が無いところだったら、よくないサイトにつなげてしまうことがある。本来は先手を打って指導しておかなければならないのだが、今は、ばたばたと物が入ってしまっていて教師の方がついていけない感じがしている。どんどん使っていくことも大事だが、情報モラルや情報リテラシーを育てる教育をもっともっていかないといけない。そうしないと SNS のトラブルも若年化しているし、子どもたちの危機意識の低さをお家の人も心配していると思います。

委 員：タイプライターの時代からワープロ。ワープロからパソコンになりました。昔、パソコンができないから現場にいられないと言って早めに辞めた人がいた。ICT が難しく困っている先生や子どもがおられるのではないかと思います。そういう状況を今後で結構なので、お話いただければと思います。

会 長：支援するという意味では、スキルアップではどうですか。

研究所：タブレットの活用ですが、スキルアップアドバイザーがそれぞれ学校を訪問し、きめ細かく支援しております。子ども達の方がすごいです。先生が説明するより、隣同士で説明し合って、子ども同士で勝手にやっていってしまう。子どもたちが日常生活の中でやっている感じがします。昨日、びわ湖放送で南笠東小学校のオンライン社会見学について流れました。コロナ禍で社会見学に行けないので Panasonic とオンラインでつないで見学するという学習をしています。その支援にもスキルアップアドバイザーが行っています。そのように、学校の先生にすべてやってくださいというのではなく、わたしたちが支援させてもらっています。

会 長：ありがとうございます。もう一点、情報モラル、情報セキュリティの件では、どうですか。

研究所：情報モラルの件ですが、従来からも小学校 6 年生や中学生に対してスマホを使う時期に、情報モラルの点で外部の講師に来てもらって、スマホの危険性や安全に使う

ために必要なことなどの学習はしてきました。それはしてきましたが、学校のことではなかった。今まではお家での使い方を学習してきた。今年からはネットを使うということが、一人一人が授業で使い、いざとなったら家庭へ持ち帰って使う。今まさに新しい情報機器を子どもたちが正しく使えるように、情報モラルを日々教室の中で学んでいる。という状況です。そうしていかないと、タブレット端末を使って、子ども同士がチャットをしてしまう。いいことも悪いことも書き込んでしまう。では、どんなことを書き込んだらいいのか、それを学校で先生と子ども達とが一緒に話しながらルールを作っていくという取り組みが始まっています。今、真っ最中ということです。

研究所：先ほどいただいた意見で、現場が追い付かないぐらいの状況になるというのが、先進的に取り組んでいる草津市の、良い面と課題であると思っています。子どもたちの学びについては、どんどん先に進んでおり、学びに対する支援はいくつかの手立てを考えて構築されていますが、そこから浮き上がってきた課題に対して同時に対処できているかという、なかなかできていないので心配だという現場の声をいただいております。学校政策推進課など教育委員会内で課題を共有しながら、現場の先生たちの声を生かした研修や取り組みをしていかないといけないと思っております。貴重な御意見ありがとうございます。来年度の研修に組み込めるかどうかは分かりませんが、講師の先生を見つけたり、実践を見つけて広げたりするなど、今後の研修の参考にさせていただきます。

委員：私も教壇に立っていたのですが、さっきは社会科の実践でしたが、今では算数科でもタブレットを使っておられるのですか。授業は45分だと思うのですが、その間に工夫されると思うのですが時間をどうしているのか、今までの授業とどう変わったのですか。

委員：今までノートに書いていたことをタブレットに書いて送ります。みんなで共有したり、自分のフォルダに記録したりしておきます。子ども自身が前の授業でどんな図を描いたかも保存フォルダの中にあるので、いつでも見られ共有もできます。

委員：皆さんがレベルアップされているということ、いろんな面でひしひしと感じています。私はついていけないので、将来の子どもたちをよろしく願います。

委員：中学校です。タブレットについていけない一人です。今、使わない授業はないという状況ですので、いわゆる年配の教員が部活指導の終わったあとに、若い先生に「どうするんや。」「どうしたらいいんや。」と尋ねて教え合いをしている。去年からもなかったわけではないが学び合いをしている。活用すると子どもの学びも変わってくるという実感があるので、教室にある子どものタブレット端末を使って教員同士が学び合う姿がたくさん見られました。身体的な疲労はあったかもしれませんが、本校の教員同士のストレスチェックでストレス0という結果が出てきました。タブレット端末がいろんな意味でコミュニケーションのツールになったと思って有難く思っています。また子どもにとっても、授業中に発言しづらい子が自分の意見

を送ることができる利点があります。おかげで全員の意見を学級で共有することができました。そこから自尊感情と言えるところまで近づくかどうか分かりませんが、「あなたの意見いいね」というような認め合いができたり、「その意見同じだったね」ということが分かり合えたりする場面もありました。

委員：声には出せないけれどもタブレットで送れるのですね。なるほど。

委員：そういう意味では教師の方があとからついていくこともありますが、子どもがそれらをどう使いたいのかが少し見えてきました。中学生だと、利用方法・使用方法については教師よりずいぶん上回っていますので、一緒に学び合えるものが学校に入ってきたと考えています。そして、それらをどう使っていくのか、どの場面で使えば子どもの学びが深まるのかを、教師が考えねばならないところも課題としてとらえています。タブレットからは少し離れるのですが、タブレットのよさでは補えない部分で課題だと思っていることを一つお話させていただきます。今年、コロナ禍で様々な行事がなくなりました。校内ですべき行事については、いろんな工夫をしながらできました。ところが、部活動が中心なのですが、対外試合など交流ができていない。それから、特に夏の大会の終わりを後輩たちが見守る中で終わっていない。そういうあたりで、辞めていく者にとってやりきった感がないことや、有終の美を飾る先輩の姿を見ていない後輩たちに情緒面でどのような影響が出るか懸念しています。そのあたりで教員が予測をしながら寄り添える時間を作るためにも、授業では子どもたちの学びが少しでも短時間で深まるようなタブレットの活用をしたいと考えています。そのために研究所の自己啓発講座を活用させてもらったり、様々な情報をいただいたりしたいと思います。

委員：今日初めて参加させていただきまして、こういうタブレットを使った授業の研究等をされていることを全然知りませんでした。子どもが中3と小6といるのですが、恥ずかしながら先生方が努力されていることも全然知らなくて、子どもたちのためにやってくださっていることを知って感謝をしています。親として心配なのは、コロナの感染者が増えて急に休校になった時のことです。タブレットを一人一台用意してもらって、学校でやるのとは違うとは思いますが、家でもできるというのはありがたい。このように先生が研究してくださって、子どもが在宅でも授業ができる。クラスのみなどと繋がることができなかったことが、子どもにとって大きな負担であったと思います。携帯電話を持っていたから、持っていた子とは連絡がとれたけれど、会うことはできなかった。そういう面でもクラス単位で意見が交換できる場があると、次に学校に行ったときに、浮いてしまうことや馴染めないことを少しでもなくせるのではないかと思います。そんなふうに、みんなですべてやれる環境がタブレットを使ってできればいいなと思っています。

委員：中学校に出入りさせてもらっていると、いつも先生方がパワーと時間を割いて子どもたちに関わってくださり、日々頭が下がる思いで有難いなと思っています。でも、もう少し先生がゆっくりできないのかなと思いました。とてもお忙しいようで。スキ



ルアップは自薦か他薦かわかりませんが、本来の先生方の勉強の時間が割けるぐらい余裕があると先生方にとってもいいなと思います。子どもたちはコロナ禍でもよく頑張っているなと思います。元気そうにしているけれど、我慢している様子も見受けられます。図書室に行くと、しんどい子がやってきます。みんなと同じように過ごすのがしんどい子がいると思うのですが、コロナ禍で特に我慢しているのではないかと思います。職員室に行き、保健の先生もフリーの先生もいつも目一杯子どもに関わっている姿を見ていると、そういう先生たちをもっと増やしてもらえないかと思ってしまいます。入らせてもらっている授業はとても楽しいです。先生方がいろいろ御準備されていると思うのですが、タブレットやパワーポイントを使って工夫されていると感じています。こういう授業があれば、子どもたちも楽しく過ごせるのだらうと思っています。

会 長：人の手当てについては、予算とか難しいですが、こういう運営委員会等で声が挙がっていないといけないと思います。状況をわたしたちが聞いて、その上で手当てが必要だろうとこの場で記録として残していくことが大切だと思います。御意見としていただいたという形で、ありがとうございます。

今御報告していただいた件を承認していただいて次に進みたいと思います。今年度活動していただいた内容を承認していただける方は挙手をお願いします。

(委員全員挙手)

ありがとうございます。過半数というか全員の了解をいただきましたので、承認いただいたものとさせていただきます。

それでは、令和3年度の事業計画について説明をお願いします。

#### 令和3年度事業計画について説明（指導主事）

会 長：何か質疑がありましたら、お願いいたします。

会 長：御意見がなければ、もしよろしければ、事業計画につきましても、承認をとらせていただきます。承認していただける場合は挙手をお願いします。

(委員全員挙手)

ありがとうございます。今年度の活動報告ならびに次年度の事業計画についても承認いただいたということで、議事進行を解かせていただきたいと思います。

ありがとうございました。

所 長：糸乗先生、議事進行ありがとうございました。

それでは、閉会にあたりまして最後に一言挨拶を申し上げます。

本日は本運営委員会に御出席いただき、また慎重な御審議の上、御承認いただきありがとうございます。皆様からいただきました貴重な御意見を参考にさせていただきながら、よりよい教育研究所の運営に努めて参ります。目まぐるしく変化する教育環境の中で、草津市は「子どもが輝く教育のまち くさつ」をテーマに掲げて、

学校や教育機関だけでなく、地域や市民全体で取り組む“ALL 草津”の精神が着実に根付いてまいりました。教育研究所は教員の資質向上や不登校の子どもたちを支えるやまびこ教育相談室を中心とした支援事業を一層充実し、草津の教育に貢献していきたいと考えております。今後も研究所の事業に関しまして、御理解と御支援をいただきますようお願い申し上げます、挨拶とさせていただきます。

本日は長い時間ありがとうございました。

これを持ちまして、令和2年度草津市立教育研究所第2回運営委員会を閉じさせていただきます。